

地元学ぶ里づくりの広がりとしみームラの「当たり前」のすごさー

山形県内陸北部最上地方から西部海岸の庄内地方までを主要活動エリアにするようになって、あらためて里地里山の各地域集落の「当たり前」のすごさを認識するようになった。

地域に根ざした里づくり活動を推進していこうと昨年結成された NPO 法人里の自然文化共育研究所は、今年度、森里川海をつなぐ里づくり活動を本格的に進めつつある。活動を進めるにあたってのポイントはただ一点「地元学ぶ」ということに尽きる。

以前もこの稿で触れたが、里地里山の自然や文化は実に複雑で多様だ。それとあいまって社会的環境、いわゆる人の暮らしのありようも多様性を見せる。だから、各地の集落に入ると、ひとくくりには規格化できないその集落独自の雰囲気というものを感じるものだ。それがいったい何なのかはよく調べてみないとわからないが、たいていの場合、地元の人々にとっては大それたことではない。集落の日常生活の営みの中で何気なく行っている「当たり前なこと」に依拠していることがほとんどなのである。その当たり前に行っているムラの人たちの暮らしの営み、知恵と技術、それこそが集落の本当のすごさであつたりするわけである。

しかし、残念なことに地域集落の住民にはあまりに日常的なことであるため、そのすごさや価値に気がついていないことが多い。住民が「何もないムラだから・・・」と半分は謙遜だが半分は本気でそう思っている発言をしばしばするのはこうしたことに起因するのだろう。そこで地元学ぶ「地元学」という視点が大切になる。この活動は表向きは外部参加者（ヨソモン）が地元の人たちと一緒に地元のことを学ぶという素朴な活動なのだ。だが本当のねらいは、逆に地元住民がヨソモンの目線の違いを生かして自分たちの暮らしを見つめなおし再発見することを目指している。里の自然文化共育研究所ではこれを主要な調査手法に位置付け、様々なやり方で各地域集落で実施している。

最近各地域の集落で地元学をやっていてふと気がついたことがある。それは峠をひとつ、あるいは川をひとつ越えただけで、ずいぶんと異なる世界が開けているということだ。集落の自然や生活文化のありようだけでなく、会合の持ち方、近所づきあいの風景などもがらっと変わるのでおもしろい。こうしたことは地元学をすすめていくときに必要な「ヨソモン」を何も遠くから呼んでくるような必要はなく、実は意外に自分たちの身近にいるということの意味するのではないだろうか。つまり集落間交流を活性化させることで、各集落相互の価値が再発見されうるということの意味するのではないだろうか。このことは地域間連携活動を行うことによる可能性の一端を指し示しているように思われる。

とにかくまずは地元の話「よく聞くこと」が重要だ。今年度、山形県は NPO 活動促進助成事業のまちづくり分野において、当研究所が提起した集落案内人養成にかかわるプログラムを採択した。これは地域集落の当たり前の日常、知恵、技術を見つめなおし、外部者に地域集落を案内することを地元の住民が行うというものである。複数の集落が活動にかかわり住民独自で運営していくこのプログラムにおいて、地元から学ぶという素朴な活

動は外部者との交流や地域づくりへ向けたより大きな可能性を秘めている。

いずれにしろ筆者にとっては大変楽しい活動となっている。各地域集落でのワークショップでは、いつも新たな発見があり驚きがある。こうしたびっくりすることを地元住民と共有しあい各地域集落の住民が交流しあうことや、愉快的仲間たちとの出会いは楽しく刺激でもある。こうしたことこそ近年課題や問題ばかりが取り沙汰されがちな地方が、本当の意味で地に根ざした地域づくりや価値の再創造を行っていくために大切なことなのではないだろうか。